

3Rプラスチック特集 川瀬産業、薬品プラ容器で強み発揮

2024年7月17日

3Rプラスチック特集（2024年）



川瀬社長

薬品プラスチック容器のリサイクル取扱数量日本一を誇る川瀬産業（川瀬幸久社長）は、昨年から「KAWASE VISION 2023-2025」を始動、引き続き持続可能な循環型社会の担い手を目指していく。同社は“リサイクルを化学する”をモットーに、とりわけマテリアルリサイクルが困難な薬品付着の使用済み容器の無害化・再資源化に強みを発揮する。昨年には金属リサイクラーとも協業、処理に困るプラスチック容器の回収を始めるなど異業種とのポストコンシューマー廃プラスチック品にも乗り出している。

同社は創業以来、化学業界で発生する使用済みPEやPPを中心にプラスチックのマテリアルリサイクルを全国展開、本社・貝塚工場と静岡工場（磐田市）において大量の使用済み容器のほか、さまざまな廃プラを受け入れている。とりわけポリ容器は月当たり約25万本、ポリドラムは同約2万本に上る。これらを破碎・ペレット化した後に「リプラギ」の独自ブランド名として角材をはじめリプラギフロアマットなどの製品に生まれ変わる。PEやPP以外についても化学の知見からリサイクル処理先を紹介、ワンストップでの対応が可能だ。

近年はクローズドリサイクルにも力を入れ、化学系企業など500社以上の取引先にリプラギや合成木材などとして再利用の提案を進めており、環境経営の一助として貢献している。

現在、両拠点とも体制強化が進行中で、メインである静岡工場では原料の投入を2階フロアから行えるように6月には破碎機を更新したほか、12月には10トン車用のスロープを新たに設置する予定。受入量の拡大・時間短縮によってトラックの24年問題にも対応していく。本社・貝塚工場でも設備更新や洗浄力向上を進め受け入れを充実しているところで、とくに半導体生産工程で使用する薬品の使用後空容器の入荷増にも対応していく。